

展覧会について



本展のタイトルであり作品名でもある「specimen」は、その言葉通り、相川勝がインターネットでみつけたイメージの「標本」です。

相川はそれらのイメージをネガプリントし、その下に光造形 3D プリンターなどで使用される紫外線硬化樹脂 (UV レジン) を重ねて紫外線を照射することで UV レジン有感光、硬化させています。このようにフィルム写真と同様の方法で現像された本作は、限りなく透明でありながらも自身の影で像を現しています。

写真は印画紙等の感光材と共に発展してきました。今回の試みはその感光材を限りなく不可視化し、写真をただ光と影のみにすること、また感光材の干渉から解放された写真は、写真としてもっとも自然な状態になると相川は考えます。

多摩美術大学在学中から複製芸術に関心を持ちつつ、2011 年頃から写真作品の制作を始めた相川ですが、写真技術の最初期と最先端への興味から、昨今は AI やヴァーチャル・リアリティを用いた作品制作をしてきました。そして本作は、写した像をいかに現すかという写真黎明期の根源的な関心に端を発しています。

相川はこれまでも写真技術の急速な発展とそれにより変化する人々の思考や行動への興味を根底に持ち作品を発表してきました。本作はさらに「specimen」というタイトルが示すように、写真技術の発展後に横たわる「写真とは」の問いに対する相川の実験的な試みでもあると言えます。

※写真技術の先駆者の一人であるウィリアム・ヘンリー・フォックス・トルボットは 1844 年発刊の「自然の鉛筆」の中で、「見本」として読者に呈示する写真を指示するために「specimen (実物見本)」という言葉を使用している。(「自然の鉛筆」赤々舎、青山勝訳、p9 注釈より)

田賀 ひかる / GALLERY TAGA2